

导游云南（日汉对照）

范广融
[日] 浅川秀二 编著

 云南大学出版社

序

呉宝璋

日本と中国は一衣帯水である。

歴史上、両国人民は長期にわたって友好と相互学習を重ねて来た。20 世紀初頭、日本は明治維新に成功し、加えるに近隣であったため、中国には日本に学ぼうという風潮が生じ、1906 年、1907 年には毎年万を越す留学生が日本に赴いた。この留学ブームの中で、雲南からの留学生を見てもかなりの数にのぼり、1904 年には 100 余人に達したが、中でも軍事学習者が多かった。1909 年、雲南に陸軍講武堂が創設された際、その責任者、幹部や大多数の教官は正に日本の軍学校から学び帰って来た者であった。

中国の改革開放以後、国際交流の高まりに従って日本と雲南の交流も絶えず強まって来ている。1981 年 11 月、昆明市は中華人民共和国国歌の作曲者である聶耳が逝去した日本国神奈川県藤沢市との間に友好都市の関係を結んだ。また多くの日本の専門学者が、目を雲南に向け、雲南に考察や研究のため来訪する人は益々増加している。20 世紀 80 年代に雲南に来た日本の一部の学者は、雲南少数民族の稲作の長い歴史と生活習俗の日本との相似性に着眼した。そして、ある学者はこの稲作文化こそ日本文化のルーツだと主張し、またある学者は照葉樹林文化論を提唱し、東南アジアの照葉樹林文化帯の発祥地と中心地は雲南であり、稲作文化が日本に伝わる前に、既に焼畑式穀物栽培文化が照葉樹林文化帯から日本に伝播していた、従って雲南こそ日本文化の発祥地だと説いた。またある学者は雲南に“ルーツ”を求め、実地考察研究の結果、大和民族の起源は雲南にあり大和民族と中国西南少数民族は源を一にすると見なしている。

2000年8月上旬、日本から石島紀之教授が雲南に考察に来られたが、彼は雲南近代史著述のための資料収集が目的であった。雲南民院の謝本書教授の要請で筆者も石島氏との座談に参加したが、その対話を通じ、また石島氏の著述要綱を見て、彼の近代雲南研究の内容が広範かつかなり深いものだと感じた。

2006年2月、筆者は招聘を受けて訪日したが、東京経済大学滞在期間に、该校の雲南研究所でその情況や研究成果を紹介してもらった。学長の村上勝彦氏は日本における雲南研究の専門家であり、その研究所の顧問を兼任しており、20世紀の80年代には数度雲南を訪れ、大量の写真を撮影し、雲南に関する論文も少なからず著している。当研究所の研究員の一人、堺憲一氏は主に欧米経済史と自動車産業を研究しているが、彼は曾てシーサンバンナ（西双版纳）の嘎洒へ行き現地の道路自動車交通量の統計調査に当たった。東京経済大学雲南研究所の主要研究テーマには、中国西部開発と雲南省、観光開発と少数民族、瀾滄江開発と東南アジア等があり、これらのテーマは全て価値あるものと言えよう。座談中に、筆者はこれらの研究テーマは現実に対応したものであると称え、更に研究範囲を拡大し、歴史方面をも開拓するよう提案しておいた。

学術文化交流と同時に、日本から雲南への観光客も絶えず増加している。ここ数年来、日本は雲南観光客の第一のソースになっており、毎年数万の旅行者が彩雲の南へ観光に来ている。中でも、2002年には13.74万人に達した。

日本からの旅行者応接の必要によりよく応え、雲南観光産業の更なる発展に貢献するために、4年制大学としては我が省唯一の外国語通訳ガイド人材養成機関である雲南師範大学外語学院は、長年に亘る英語ガイド養成の基礎の上に、2001年から英・日バイリンガルのガイド養成を始めた。当該クラスの22名の学生は、在校期間中に中国昆明国際旅遊交易会の通訳ガイドの仕事に参加し、その優秀な専門能力は各方面から好評を博した。また、2003年には、教育部の批准を得て、雲南師範大学外語学院は日本語専門クラスを設置、日語科を設立し、日本語通訳ガイド養成を主たる目的とし、現在2学年計58名の学生が勉学している。

日本語専攻教育と新設学科を強化し、同時に我が省の全国ガイド資格テス

ト用の日本語ガイド教材が存在しない状況を改変すべく、範廣融氏と浅川秀二氏が共同で『雲南ガイド(日漢対照)』を編集出版することとなった。たいへん喜ばしいことである。範廣融氏は雲南師範大学外語学院日語系主任であり、曾て通訳として十数回の訪日経験があり、日本語ガイドとしての資格も高く、確固たる日本語の基礎と豊富な教学経験を有している。浅川秀二氏は雲南師範大学文理学院外語科外国人教師であり、日本の東京大学法学部を卒業後、長年中国関係の仕事に携わり、この間中国全省を踏破した中国通である。定年退職後雲南に来て、雲南師範大学世博学院にて日本語旅遊課程の教鞭を執って来た。本書は、兩人多年の教学の成果であり、兩人相互の切磋琢磨の結晶でもある。

『雲南ガイド(日漢対照)』は、雲南省で初めての日本語ガイド教材であり、創始の功があると言えよう。特に傑出している点は、内容が豊富で、題材の選択が適切、本場の日本語が用いられ、日本からの旅行者への対応がよく考慮されている点である。私は、本書が我が省の日本語通訳ガイド養成教育の課程で、また日本人観光客の雲南個人旅行の案内書として重要な役割を果たすものと信じている。これに鑑み、ここに序を認めることは私の喜びであり、かつ多くの読者に衷心より推薦する次第である。

2006年4月18日

(呉宝璋氏は雲南師範大学外語学院党委書記、教授、雲南師範大学旅遊文化研究所所長、雲南省中国近代史研究会会長の職にある。)

序

吴宝璋

日本与中国一衣带水。

历史上，两国人民长期友好，相互学习。20 世纪初，因为明治维新的成功，加之又是近邻，中国兴起了向日本学习之风，1906、1907 年中国赴日留学者每年均在万人以上。在这个留学的热潮中，绝徼云南留日学生也有相当的数量，1904 年达 100 多人，其中学习军事的居多。1909 年云南创办陆军讲武堂，其负责人、骨干和大多数教官正是从日本军校学成归来者。

中国改革开放以后，随着国际交流逐渐增多，日本与云南的交往也不断加强。1981 年 11 月，昆明市与中华人民共和国国歌曲作者聂耳逝世的地方日本神奈川县藤泽市结为友好城市。不少日本专家学者将目光投向云南。到云南考察和研究的人越来越多。20 世纪 80 年代，一些来滇考察的日本学者注意到云南一些少数民族的稻作历史极其悠久，生活习俗与日本极其相似；有的学者说稻作文化是日本文化的源头；有的学者提出照叶树林文化论，说东亚照叶树林文化带的发源地和中心地在云南，在稻作文化传到日本之前，火烧旱地杂谷栽培文化已从照叶树林文化带传至日本，因此说云南是日本文化的发源地；还有的日本学者到云南“寻根”，他们在实地考察研究后，认为倭族起源于云南，倭族与中国西南少数民族同属一个族源。

2000 年 8 月上旬，日本教授石岛纪之来滇考察，他是为撰写云南近代史收集资料而来的。应云南民族学院谢本书教授的邀请，笔者参加了与石岛的座谈，从交谈中以及石岛的写作提纲来看，笔者感到他对近代云南的研究内容比较广泛，并且是有一定深度的。

2006年2月,笔者应邀赴日考察访问,在东京经济大学期间,该校云南研究所给我们介绍了该所的情况及研究成果。东京经济大学校长村上胜彦是日本研究云南的专家,兼该所的顾问,他在20世纪80年代数度到云南考察研究,拍摄大量云南的照片,写了不少有关云南的文章。该所另一研究员堺宪一主要研究欧美经济史和汽车产业问题,曾到过云南的西双版纳嘎洒统计当地公路上行驶的汽车数量。东京经济大学云南研究所主研题目还有中国西部开发与云南省、旅游开发和少数民族文化、澜沧江开发和东南亚等,应该说这些题目都很有价值。座谈中,笔者谈到这些研究问题都是针对现实的,建议还应扩大研究范围,向历史方面拓展。

在学术文化交流的同时,日本来滇旅游的人数也不断增加。多年来,日本一直是云南旅游第一大客源国,每年都有数万名游客到彩云之南观光,其中2002年达13.74万人。

为了更好地适应接待日本游客的需要,为云南旅游产业的发展进一步做贡献,作为4年制的大学,云南省唯一培养外语翻译导游人才的云南师范大学外语学院,在长期培养英语导游的基础上,于2001年开始培养英、日双语导游。该班22名学生在校期间就参加中国昆明国际旅游交易会的翻译导游服务工作,其良好的专业素质受到各方面的好评。2003年,经教育部批准,云南师范大学外语学院正式设置日语专业,并建立日语系,培养目标以日语翻译导游为主,现在在读的学生共两届58人。

为了加强专业和学科建设,同时也为改变云南省的全国导游资格证考试中没有日语导游教材的状况,范广融和浅川秀二合作编写出版了《导游云南(日汉对照)》,这是一件可喜可贺的事。范广融老师是云南师大外语学院日语系系主任,曾作为翻译十余次赴日,又是资深日语导游,有着扎实的日语功底和丰富的教学经验。浅川秀二先生是云南师大文理学院外语系外籍教师,早年毕业

于日本东京大学法律系，长年从事有关中国的业务，在此期间走遍全中国，是个中国通。退休后来云南，在云南师大世博学院执教日语旅游课程多年。本书既是两人多年教学的成果，又是两人相互切磋研究的结晶。

《导游云南（日汉对照）》是云南省第一部日语导游教材，有开创之功。其突出特点是：内容丰富，选材精当，日语地道，面向日本来滇旅游的针对性强。我深信，它将在云南省培养日语翻译导游的教育中，日本观光客自助游滇中发挥重要作用。有鉴于此，我乐之为序，并热情向广大读者推荐。

2006年4月18日

（作者为云南师范大学外语学院党委书记、教授，云南师大旅游文化研究所所长，云南省中国近代史研究会会长）

まえがき

雲南省は、観光客の憧れの地であり毎年かなりの内外観光客を受け入れています。省政府も観光事業の発展を重視し、省の産業の柱と位置付けています。また、中国とアセアン諸国自由貿易圏設立の進展に伴い、雲南省が東南アジアや南アジアに近いという地理的利点から、それらの国との貿易や国際会議、文化交流も年々盛んになり、その面からの人の往来も増えて来ています。

それでは、日本と観光客の関係はどうでしょうか。日本観光客は、先ず北京、上海や西安など伝統的な漢民族文化圏に行きます。特にグループツアーは、ほとんどがそれらの先進的観光地を目的地としています。また、内陸部を志向する旅のエキスパート達にとっても、敦煌やトルファン、チベット、九寨溝といった地域が主な対象になっているに過ぎません。雲南省は、外資導入の面だけではなく、観光事業の面から見ても“発展途上国”段階にあり、“西部大開発”の大方針の下で、観光事業の発展促進は焦眉の急務と言えますでしょう。

雲南省は観光大国であります。雲南に居住する25の少数民族のエキゾチックな風俗習慣や、特異な地形が醸し出す景観美、さらには“茶馬古道”や“失われた地平線”のモデルと言われるシャングリラなどのロマン、日本の稲作文明のルーツ探訪等々、開拓の余地は限りなく大きいと思います。このような省内に有する豊富な観光資源から見れば、現在受け入れている観光客の数は極めて少ないと言わざるを得ません。

それでは、どうやって潜在需要を顕在化したらいでしょうか。

二つの面から考えなければならないと思います。一つは、交通や観光施設など、いわゆるハードウェアの面での一層の開発整備です。これは、政府を中心とした関係部門が推進すべき課題であり、既に高速道路の整備や都市改造が積極的に推進されています。この面ではかなりの成果をあげつつあると

言えましょう。

もう一つは、旅行社やホテルのサービス向上、分かり易い地図やガイドブックの整備、それに優秀なガイドの育成と言ったソフトウェアの面です。特にガイドの良し悪しで旅行の良否が決まり、そのサービス如何で旅の印象が決まります。ガイドは民間外交の先兵です。単にことばができるだけでなく、相手国の事情にも通じ、国際的常識をも持ち合わせたガイドの育成は、まさに喫緊の課題です。

本書は、そう言った観点から編集した日本語ガイド養成書で、特に日本語ガイド資格受験者を念頭に置いています。それと同時に、日本語学習者の課外テキストや、日本人観光客用のガイドブックとしても利用できるよう、市販の旅行案内書にはない日本人向けの内容を極力盛り込んであります。

また、本書は『雲南導游基礎知識』、『帶你游雲南』、『走遍彩雲南』などを参考にさせて頂きました。固有名詞の日本語読みや少数民族に関する基本的事項を巻末に付録として掲載しました。

なお、本書編集に当りましては、雲南師範大学外語学院呉宝璋教授のご指導を賜りました。また、本書出版に際しましては、日本国際交流基金北京事務所から一部助成を頂きました。関係各位に衷心からお礼申し上げます。

最後に、本書にはまだまだ不足の点があると思いますが、ご叱正を頂ければ幸いです。

前 言

云南每年都接待来自海内外的大量游客。云南省政府非常重视文化产业的发展，把旅游业定位为云南省的支柱产业。另外，由于云南省具有临近东南亚和南亚的地理优势，现在正在建设中国—东盟自由贸易区，以东盟各国为主的国际会议、贸易及文化交流逐年增多，由此带来的人员交往也不断增加。

那么，云南省与日本旅游者的关系怎么样呢？一般的日本旅游者前往中国观光的话，首先会选择前往以北京、上海、西安为中心的传统汉文化圈。来自日本的旅游团大都以上述所谓发达地区为旅游目的地。而对中国已有一定了解的一部分日本人前往中国内地观光的话，他们选择的目的地也不过是敦煌、吐鲁番、西藏和九寨沟这样的地区。内陆地区不仅在吸引外资方面，在旅游业方面也处于“发展中国家”的阶段，因此有必要借助“西部大开发”的东风来谋求发展。

云南省在旅游方面已经是旅游大省，省内居住着 25 个少数民族，他们各自都有独特的风俗习惯，同时云南具有由独特的地貌孕育出的美景，如有在《消失的地平线》中被浪漫地比喻为人间仙境的香格里拉以及在日本一直受到重视，被深入探索的稻作文明等，但是与丰富的旅游资源相比，目前云南所接待的游客人数仍较少。因此云南的旅游资源还有巨大的开发潜能。

那么怎样做才能使这种潜在需要变为现实呢？这得从两个方面来考虑。

首先是硬件方面的进一步建设，比如说建设更便捷的交通和更完备的住宿设施。这方面必须由以政府为主的各相关部门来牵头完成。云南省政府目前正在积极地推进高速公路的建设和城市改造，而且已经取得了可观的成效。

其次是软件方面的建设，比如说改善旅行社的接待质量、制作清晰易懂的地图和旅游指南，提高饭店的服务质量，培养优秀的导游人才。这些内容中，导游服务的好坏直接影响旅游的质量，而导游的工作也就成了影响旅游质量的

关键。可以说导游是民间外交的使者。他们不仅仅应该会讲外语，还应该了解对象国的国情民情，具有国际常识。培养这样的导游成为发展云南旅游业的一个紧迫课题。

本书就是本为培养合格的日语导游这样的目的而编写的，同时我们还特别把希望参加导游资格考试者的愿望考虑在内。本书还可以作为日语学习者的课外教材和面向日本旅游者的一种旅游指南，书中编入了很多日本游客希望了解的内容，这些内容在现在市面上可以见到的旅游指南方面的书籍中尚未得见。

本书参阅了《云南导游基础知识》、《带你游云南》及《走遍彩云南》等书，在此特予说明。此外，相关固有名词的日语读音及与少数民族有关的基本情况作为附录附于书后（注：中文对照部分未作翻译）。

本书在编写过程中一直得到云南师范大学外语学院吴宝璋教授的指导和帮助，并得到日本国际交流基金北京事务所的部分资助，在此谨表感谢。

最后，本书中难免还有不少不足之处，因此希望得到读者的帮助和指正。

目 次

一 日本語ガイドの心得	(1)
(一) 日本人観光客の特徴	(1)
(二) 日語ガイドの言葉遣い	(3)
(三) ガイド説明の具体例	(4)
二 雲南概況	(7)
(一) 概 要	(7)
1. 地形・地貌・気候	(7)
2. 自然資源	(8)
3. 観光資源	(9)
(二) 問題と解答	(11)
1. 行政区画と周辺の省・国	(11)
2. 地形・地貌	(12)
3. 気 候	(13)
4. 河川と湖水	(14)
5. 資 源 (“三大王国”)	(15)
6. 民 族	(16)
7. 宗 教	(17)
8. 雲南の観光業	(17)
三 雲南の歴史	(19)
(一) 歴史概要	(19)
1. 元謀猿人	(19)
2. 新石器時代	(19)
3. 古滇国と青銅器文明	(20)
4. 南詔国と大理国	(21)

5. 元代の雲南	(21)
6. 明清時代の雲南	(21)
7. 抗日戦争時期の雲南	(22)
8. 解放戦争時期の雲南	(23)
(二) 問題と解答	(25)
 四 雲南の観光地案内	(28)
(一) 概 要	(28)
1. 主な景勝地と観光資源	(28)
2. 主な観光コース	(29)
(二) 主要観光地案内	(30)
1. 昆 明	(30)
A. 石 林	(32)
B. 世界園芸博覧園	(36)
C. 雲南民族村	(38)
2. シーサンバンナ	(49)
3. 大 理	(52)
4. 麗 江	(56)
5. シャングリラ	(60)
6. 騰 衝	(64)
(三) 問題と解答	(68)
1. 昆 明	(68)
A. 石 林	(68)
B. 世界園芸博覧園	(71)
C. 雲南民族村	(77)
2. シーサンバンナ	(81)
3. 大 理	(82)
4. 麗 江	(85)
5. シャングリラ	(89)
6. 騰 衝	(91)

(付録)	(95)
1. 雲南省の主要地名の日本語読み	(95)
2. 雲南省の主要な山・川・湖・観光地・寺院の日本語読み	(97)
3. 雲南省の少数民族一覧表	(99)
4. 雲南省の少数民族の主な祭一覧表	(101)
5. 中国の時代区分の日本語読み	(103)

目 录

一 日语导游注意事项	(105)
(一) 日本游客的特点	(105)
(二) 日语导游使用的语言	(106)
(三) 导游解说的例子	(107)
二 云南概况	(109)
(一) 概 况	(109)
1. 地形·地貌·气候	(109)
2. 自然资源	(110)
3. 旅游资源	(111)
(二) 云南概况问答	(112)
1. 行政区划和邻省邻国	(112)
2. 地形·地貌	(112)
3. 气 候	(114)
4. 云南的水系与湖泊	(114)
5. 资 源 (“三大王国”)	(115)
6. 民 族	(116)
7. 宗 教	(116)
8. 云南的旅游业	(117)
三、云南的历史	(118)
(一) 历史概述	(118)
1. 元谋猿人	(118)
2. 新石器时代	(118)
3. 古滇国与青铜器文明	(118)

4. 南诏国与大理国	(119)
5. 元代的云南	(119)
6. 明清时期的云南	(120)
7. 抗日战争时期的云南	(120)
8. 解放战争时期的云南	(121)
(二) 问 答	(121)
 四 云南景区导游	(123)
(一) 概 要	(123)
1. 主要的风景名胜和旅游资源	(123)
2. 旅游主要线路	(124)
(二) 主要景点导游	(125)
1. 昆 明	(125)
A. 石 林	(126)
B. 世博园	(128)
C. 云南民族村	(130)
2. 西双版纳	(135)
3. 大 理	(138)
4. 丽 江	(140)
5. 香格里拉	(144)
6. 腾 冲	(147)
(三) 问 答	(149)
1. 昆 明	(149)
A. 石 林	(149)
B. 世博园	(152)
C. 云南民族村	(156)
2. 西双版纳	(159)
3. 大 理	(159)
4. 丽 江	(162)
5. 香格里拉	(164)
6. 腾 冲	(166)

一 日本語ガイドの心得

(一) 日本人観光客の特徴

2004年の雲南省受入れ観光客は延べ6000万人を数え、観光収入は345億元にのぼっています。そのうち海外からの旅行者は80万人近くで、前年がサーズ問題で落ち込んでいたせいもあり、前年比約25%の増加となっています。その中で日本人の占める比率は7万人、10%に過ぎませんが、今後は北京、上海や西安などの観光を済ませた人たちが、更に奥深い中国文化や自然の観光資源を求めて、雲南にやって来ることが大いに期待されます。なお、2005年の観光客数は6600万人で、うち海外からは150万人に達したようです。

外国人のガイドをつとめる時には、それぞれの特徴や好みを理解し、お客に合わせた案内をしなければなりません。では、日本人観光客の特徴はどんな点にあるのでしょうか。もちろん各人各様ですが、一般論として共通点をいくつか挙げてみましょう。

第一は、中国の歴史や文化にかなり詳しいという点です。それは、稲作文明を始め、漢字、仏教、儒教（じゅきょう）等々、日本文化の源泉が多く中国から渡来して来ているので、もともと共通点が多い上に、学校で中国文化や歴史を学習し、論語（ろんご）、唐詩（とうし）、三国志演義（さんごくし えんぎ）などに親しんで来ているからです。それに、中国に来る観光客はとりわけ中国に関心が大きいことにも留意し、いろいろな質問に対応できるよう準備が必要です。

次は、スケジュールや時間にうるさい点です。中国では、その場になってみないと分からないことが少なからずあります。ところが日本人は最初から最後まで、きちんと日程が決まっていなと文句が出ます。その代わり、決められたことは忠実に守ります。時間、集合場所や注意事項、観光地でのきまりなど、事前に話しておけば必ず守ってもらえます。狭い社会のため、お